

研究プロジェクト名称	Malaria eradication in the era of COVID-19 pandemic: a study integrating sociological, economic, and medical approaches to overcome the challenges in tropical Africa (新型コロナウイルス感染症パンデミック下のマラリア根絶：社会・経済学と医学の統合的アプローチを通じた熱帯アフリカにおける挑戦)
研究期間	2021年12月～2024年11月

研究代表者

氏名	金子 明
所属機関・役職	大阪市立大学 大学院医学研究科 感染症科学研究センター・センター長/寄生虫学分野・教授

研究概要

マラリアは、最も新しい感染症である COVID-19 と対にある人類最古の感染症といえる。国連が掲げる持続可能な開発目標(SDGs)の一つである地球規模でのマラリア流行終焉に向けて、熱帯アフリカは最大の障壁であったが、今般の COVID-19 の侵入はそこに新たな力学を生み出している。我々はマラリア流行地コミュニティに密接した研究により、この 2 つの感染症によって引き起こされる社会動態を読み解き、感染症を制圧するための社会の条件とは何かを明らかにすることを究極のゴールとする。今般、様々なマラリア診断、治療、予防の医学的ツールが開発されてきた一方で、さらなる制圧に向けては、安定的でかつ効率的にツールを供給するための社会経済政策のあり方、また住民の積極的なツール利用を促す方策といった非医薬的アプローチがカギになると考えられる。特に、今般のパンデミック下では、上述の医学的ツールの配分から受容、活用に至る過程の重要性と脆弱性が再認識された。しかしながら、こうした文化・社会・経済的因子のマラリア伝播への寄与について、データに基づいた学術的解析は十分になされていない。我々は高度マラリア流行地である熱帯アフリカのビクトリア湖周辺地域において（写真 1）、医学、経済学、文化人類学の多角的視点から COVID-19 流行下のマラリア伝播を読み解くことで、マラリア対策を着実なものとし、マラリア撲滅に向けた戦略のさらなるアップデートを目指す。また、得られた知見を環ビクトリア湖周辺国が集うコンソーシアムにおいて共有、議論することで、学術的成果にとどまらない、社会実装につながる研究を推進する。マラリアで見られる医学的ツールとその展開、受容のステップは、COVID-19 を含む様々な感染症に共通するものであり、得られる研究成果は普遍的な感染症対策構築に資するものである。



写真 1. (左) ビクトリア湖周辺地域、ホマベイ郡、ケニア：大きな島、小島、内陸沿岸部を含む研究対象地。(右) 対象においてコミュニティ・ヘルス・ボランティアの家庭訪問時にマラリアのテストを受けるよる母子。